

こどもの歌における〈付点8分音符+16分音符〉の演奏法に関する一考察

大阪芸術大学短期大学部 通信教育部 保育学科 特任講師 塩野亜矢子

1 本研究の背景と目的

大阪芸術大学短期大学部の入学生の中には、入学する時点においてピアノの経験が無い、若しくは無いに等しい状況で入学を迎える学生が毎年増加の一途を辿っている状況である。学生は保育の様々な専門分野における知識や実技を2年間で取得し、2年後の卒業と同時にあらゆるスキルを活用しながら現場に携わる学生が多くいることが想定される。そのスキルの一端にピアノを演奏すること及び弾き歌いを演奏することが挙げられる。しかし、ピアノの実技は初心者であるほど基礎力の習得やレパートリーの取得に多大な時間と労力を要することは、少しでもピアノを嗜む経験者であれば想像に難くないであろう。ピアノ初心者が1年間（選択授業を含めると2年間）でピアノを弾くこと及び弾き歌いを演奏することが容易に実演出来るまでに至るには、日々の練習の積み重ねが重要となるが、その積み重ねの程度により、学生間で基礎力の段階に相違が生じることになる。また、指導者においても初心者が年々増加しているという現状を認識し、その状況下に即した指導法が求められると考える。実際に、筆者が授業で担当する学生においても、年々多くの初心者と接することが多くなっている。初心者といっても一概に皆同じレベルや演奏上の課題を持つ訳ではないことから、1人1人の現状をよく把握した上での指導を行うことが必須となるが、必修授業としては1年間というこの短い期間の中で、各々の学生が持つ基礎力を向上させながらレパートリーを取得するまでに至るには、指導者側にも相当の苦心や最大限の努力の必要性を痛感している。

指導の内容は多々ある中で、筆者は少しでも童謡曲が初心者にも演奏し易くするツールの1つとして、どの点に着目するべきであるかということ考えた結果、童謡曲には付点8分音符+16分音符の組み合わせによるリズムが多々見られることに着目した。即ち、学生がこのリズムの演奏法を会得することが、より多くのレパートリーの取得を容易にする有効な手法に繋がるのではないかという可能性を見出すため、このリズムの演奏法に関する詳細を取り上げ、考察することが本論の目的である。

2 研究の内容と方法

本研究では、まずこどもの歌に現れる付点8分音符+16分音符のリズムは、どれくらいの頻度で現れるのかということを正確に把握する必要があった。そのため、今回の研究対象資料とした大阪芸術大学短期大学部の授業で採択されているテキスト「こどもの歌 200」

を基に、当該リズムがそれぞれの曲に現れる頻度を表に示し、分析結果を得た。

次の段階では、当該リズムが持つ特質と、大阪芸術大学短期大学部の学生が当該リズムを演奏するに当たり困難な点を複数浮き彫りにした。学生自身が困難だと捉えている要因は必ずしも同一要因ではないが、筆者が複数の要因を挙げる中に共感する一項目は、それらの要因に当てはまる可能性が高いことが見えた。

それらを踏まえた上で、次の段階においては、筆者が指導する過程で学生の演奏がどのように変化していったのかを考察し、その中で複数の成功例を提示することを試みた。この段階での考察では、学生自身が自分の演奏はどのような状況になっているのか、また、学生自身の演奏上の癖や特性がどのように演奏に反映しているのかを学生自身に把握させることが最初の考察段階である。次に、学生に前述内容を把握させた上で、筆者は学生に対して（句読点を削除してください）正しいリズムの奏法に結び付けるためのアプローチの方法を享受することを試みた。享受は基本的に言葉やジェスチャーを中心に伝達することになり、言葉の程度（「の度合い」を削除してください）や解釈の仕方は学生1人1人によって異なるため、筆者からのアプローチも学生の演奏状況や解釈の仕方に応じた方法により提示した。奏法の改善やアプローチは全てを解決することは困難であるが、童謡における当該リズムの特性を把握し、学生自身に演奏の現状を把握させることや演奏意識を問うことから導き出される奏法のアプローチは、考察の1つとして結論付けるには充分なところまで導き出されるものと期待している。更には、今回は特定のリズムに着目して考察することに限定しているところであるが、他の奏法に関する考察においても有効な手法であると考えられる。

3 まとめ

本研究では、最終的に実技に関する考察が中心となるため、論理的であったとしても確たる証拠がない限り、考察内容及び結果を断定することは出来ない。しかし、本研究では付点8分音符+16分音符のリズムにおける特性を述べ、学生の演奏において現状の把握や演奏意識を確認しながら、正しい奏法との相違の要因における考察を重ねてきた。そして、その考察から、学生の当該リズムにおける演奏を実践的に導き出すことが出来た。この試みによって培われた演奏技術は、本学を卒業し、保育現場に携わる際の演奏にも紐付けることが可能となり、有意義な結果が得られたと考える。